

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



匠林

SAKABAYASHI

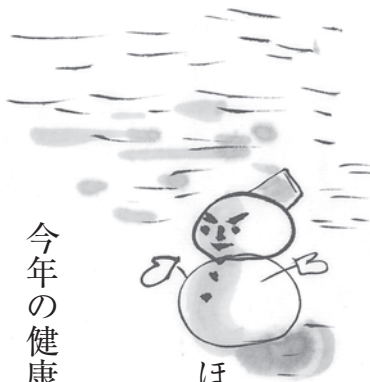
隨筆特集



酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



ほろ酔い詩歌紀行

—— 万太郎の酒

長女のみた白川静の顔

腎臓移植ドナー

二人の技術者、二つの銅像

春の七草

今年
の健康

宇宙飛行士の泣き所

骨粗鬆症

絵と文

“愛犬チロ”

夢の話

志村

有

弘
…
20

佐川

毅

彦
…
18

杉本

忠

夫
…
16

蝉しぐれ

宮地

智

子
…
14

私の池袋

内野

潤

子
…
12

万太郎の酒

日高

昭

二
…
10

長女のみた白川静の顔

安森

敏

隆
…
8

腎臓移植ドナー

高橋

和

島
…
6

二人の技術者、二つの銅像

池井

和

優
…
4

春の七草

…
1

絵と文 型絵染版画メードリング市のミュージアム さかもと ふさ…22

絵と文 型絵染版画オーストリアで実った

「テンノーワイン」の話 さかもと ふさ…24

「生きる緊張」 志村 栄 守…25

絵と文 ハートかざら 中西 美子…27

死なす、殺す… 桐原 良 光…28

コーヒ―は俳句を呼ぶのか 片岡 義 男…30

いま食べたいものベスト・10 新田 啓 造…32

雪の桜田門 永岡 慶之助…34

「気になる木」 山本 千 明…36

稲を育て、思う 宮本 富 夫…38

清姫の幽霊 山西 靖 彦…40

小説・江戸神仏歳時記(23)―根津神社 郡 順 史…42

表紙・グラビア…讀岐かがり手まり



二人の技術者、二つの銅像

八田興一と台湾

台湾南部の広大な嘉南平野を潤し、旱魃に悩まされていた不毛の地を台湾最大の穀倉地帯に変えた烏山頭ダム、そのダムを見下ろす場所にひとつの銅像がある。あぐらに近いリラククスした姿勢で左手は太ももの上に、軽く握った右手をこめかみにあて彼方を見つめる銅像の台座には「嘉南大圳設計者・八田興一氏像」との文字が見られる。現在、台湾に存在する唯一の日本人の銅像である。なぜ、日本ではほとんど知られていない人物が台湾で銅像となっ



ているのであろうか。

東大工学部土木科を卒業した八田は、当時日本の植民地であった台湾へと渡った。台湾南部嘉南平野の調査をおこなったが、同地域は灌漑設備が不十分で十五万ヘクタールほどの田畑は常に旱魃の危険にさらされていた。八田は大規模なダムを建設する計画を上司に提出し、精査の結果国会で認められ、国費の補助も付くことになった。八田は一九二〇年のスタートから三〇年の完成にいたるまで現地で工事を指揮した。悪戦苦闘の末、完成した広大な水利事業は、コンクリートをほとんど使用し

池井 優 (慶應義塾大学名誉教授)

ない工法であるため、土砂がたまりにくく他に例を見ない「自然と融合したダム」と呼ばれている。また水路も一万六〇〇〇キロにわたって細かくはりめぐらされた。

土木作業の遂行に当り、八田は労働環境を整備し、自ら危険な現場にも足を踏み入れ、事故が起こった際には日本人も台湾人も分け隔てなく扱うなど、その人柄は多くの作業員からも慕われていた。ダム完成後、銅像が建てられたのも当然であった。

戦後、共産党との内戦に敗れた蒋介石率いる国民党が大陸から移駐し、台

湾を支配するとともに五十年に及んだ日本の影響を排除しようと、八田の銅像も破壊される運命が迫った。しかし、銅像は地元の台湾人有志によって密かに隠され、一九八一年になって再びダムを見下ろす元の位置に設置されたのだった。

現在、台湾では中学生向けの教科書『認識台湾―歴史篇』に八田の業績がくわしく紹介され、地元の農民はいまでも八田を“台湾農業の父”と呼んでいるという。

ファン・ドールンと福島

猪苗代湖―福島県中央部にあって磐梯山の南麓にある堰き止め湖として知られている。その猪苗代湖北西の岸から湖の眺めを一望に収める二メートル四〇センチの立像は、猪苗代湖の水を安積平野に引いた安積疏水工事において多大な功績を果たしたオランダ人ドールンを記念して建てられたものである。二百年以上に及ぶ鎖国を打ち破られ、

明治維新を迎えた日本は、国土の保安と殖産のため、河川や港湾の整備に取り掛かった。その指導のため“お雇い外国人”のひとりとして招かれたのがドールンであった。彼の母国オランダはその大半が長期間をかけて干拓された土地からなり、河川、港湾、灌漑などの土木技術分野においてヨーロッパではオランダ人の力量が群を抜いていた。一八七二年に来日したドールンにまず委ねられたのは主要な大川川とその水源の砂防工事の立案であった。これに河川は徳川末期以後ほとんど放置されており、その改修は緊急の課題となっていた。

ドールンは来日二ヶ月後に早くも利根川全域の巡視をおこない、日本最初の量水標を設置して河川工学の基礎を据え、さらに猪苗代湖の安積疏水工事の設計に当った。猪苗代湖の水を東の安積平野に引いて田畑の旱害を防ぎ、新田を開くドールンの工事は、内務卿大久保利通の維新によって職を失った士族に産業を与え、彼らの新政府に

対する不平、不満を防ごうという狙いも秘められていたのである。ドールンの計画書は、灌漑所要水量の計算に始まり、猪苗代湖の水位の測定法、堰の設計など着実な内容であったが、特に苦心の跡が見られるのは、湖水の自然水位に変化をきたすことがあつては会津へ流れる既得水利権を侵すことになると慎重なプランを練ったことである。

こうしたドールンの工事は、後の猪苗代湖水力発電事業につながることになる。

こうした業績が評価され、一九三一年銅像の建設となった。しかし、第二次大戦がはじまると、オランダは敵国となり、銅像は供出の対象になったが、地元のひとびとが両足から切つて地中に埋め、戦後まで守り通した。

八田とドールン、二人の技師の情熱を傾けた水利事業、それは時代を超え地元のひとびとの心に生き続けているのである。

腎臓移植ドナー



高橋 和島

(作家・郷土史家)

昨年九月、結婚四十余年目にして初めて家内に少しは胸の張れる贈り物をした。

名も無い男が古女房に何を贈ろうと知ったことか、と言われそうだが、贈ったものがわたしの腎臓だったとすれば幾らか興味を示していただけなのではあるまいか。

つまり、臓器移植の提供者(ドナー)となった男がポンコツ腎臓の一つを老妻に贈った話を聞いていたかどうかという次第ゆえ、暫時お付き合いいただきたい。

わが国の腎臓移植は年間一二〇〇例ほどみられ、累計移植患者は二万二〇〇〇人を超えるそうだから、移植手術そのものはや珍しい手術ではない。

事実、わたしたち夫婦が入院中、お世話になった名古屋第二赤十字病院の腎臓移植病棟は手術前の検査入院患者と手術を済ませた患者とで満杯状態だった。

とは言え、世間では腎臓移植がまだ特別視されており、「大変だったね」と慰労の声をかけられることが多い。

相手が親しい友人の場合、わたしはこう応じている。

「いや、レシピエントの家内は確かに大変だけど、ドナーのほうは盲腸の手術程度さ。特別苦しいこと辛いことがあったとすれば、半世紀の付き合いになるタバコ(喫煙)をやめさせられたことだよ」

照れ隠しも多少はあったが、これが正直な感想だった。

ドナーは順調なら手術の翌日からでも飲み食いできる。ひよっとすると盲腸の手術より楽だと言うべきなのかも

しれない。

友人は冷やかすことも忘れない。

「それにしても、七十過ぎで腹切りをして腎臓をくれてやるとは、よほどカミさんに借りがあるんだな」

まあ、借りがないとは思わないけれど、こう答えることにしている。

「女房に先に死なれてはかなわんからな。ちゃんと見送ってもらえるなら、腎臓のひとつくらい喜んでくれてやるさ」

術前術後の入院期間中に目にした腎臓移植当事者の組み合わせは、夫婦が最も多く、しかも夫から妻へというわしたちのようなケースが目立った。

友人の冷やかしに対する切り返しであるにしても、半分は本音であり、同様の考えのドナー亭主は多いのではないかと思う。

高齢であることを含め、様々な意味で条件の悪い男がドナーを務める決意をしたのは、人工透析によってジリ貧で衰弱し、寿命を細らせ、肉体的にも精神的にも追い詰められてゆく妻の姿

を見かねたからである。

これが妻に対する夫の愛情というなら、まあそうなのかもしれないが、「自分より先に死なれてはかなわない、なんとかしなければ」という身勝手な思いがあったのも事実だ。

人工透析から解放された老妻は、ようやくやく人並みの生活ができるようになったと、移植手術をしたことを心底よこんでいる。

透析には血液透析と腹膜透析の二通りがある。妻の場合は日に四回、合わせて約六時間行動の自由を奪われる後者のほうだった。この拘束がなくなったのだから嬉しがるのは当然だろう。

わたしも医学の進歩にどれほど感謝してもしきれない気持ちでいる。

しかし、手放して喜んでいるわれら夫婦に病院担当部署の看護師部長さん（むかしの婦長さんか）が厳しい口調で言った。

「勝負はこれからですよ」
手術前に参考資料として病院からもらった印刷物には、レシピアエントに起

こる移植後の感染症、合併症、薬の副作用がずらりと列記されている。

まともな目を通したのでは、怖くなって手術する気が失せる代物だったので、斜め読みしていたものだ。

改めてこれを丹念に読んでみて、顔が強ばってしまった。

移植手術後三、四ヶ月の「導入期」の注意事項、同四ヶ月以降の「維持期」の注意事項という形で記述されているのだが、一口で言えば、レシピアエントが如何に綱渡り状態であるかが記されている。まさに勝負はこれからののだ。

ま、しかし、人間も六十、七十となればその綱が細いか太いか、切れにくいか切れやすいかの違いはあっても、みな綱渡り状態である。改めてビビることもないわけだ。

ボンコツ腎臓を提供した男は妻から少しは感謝されることになった。一方、彼の妻は人工透析と縁が切れただけで、幸せな気持ちになっっている。わたしは、これだけで十分だと思っっている。

長女のみた白川静の顔

白川静先生の長女の津崎史さんには、学生時代、先生の研究室をお尋ねしたときお会いしたように思う。時々、先生の研究室をお二人のお嬢さんが訪ねてお居られて、先生の、身の回りや、お食事のお世話などのお手伝をされていたように思う。そのお一人が、長女の津崎史さんであった。白川静先生生誕一〇〇年を記念して出された歌集『風』の「あとがき」で、先生亡き後の身辺のことに ついて、次のように書かれて いるのが印象に残った。



「月日とは何とはやくすぎゆくことか。四月六日は母の七回忌。(中略)私は、相かわらず週のうち桂で四日四晩をすごしている。体力的にも精神的にも限界ラインをこえた。伊丹での三日が私にとつてのオアシス。(中略)父に命名してもらった健は三歳半になり、弟の悠もうまれました。幼子の成長は著しく、会うたびに元気と喜びをもらっている」(二〇一〇年三月一〇日)

奥様が亡くなられて七年、そして白川静先生生誕百年である、ことが書か

安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授・歌人)

れている。この中に出てくる「桂」は、先生のお宅のある西京区桂稲荷山であり「伊丹」は今現在、史さんの住んでおられるところである。生前において、お孫さんに命名されたことも記されている。

半世紀前母の使ひし謡の本もちゆく
今宵の能を見るため(同)
野宮のシテを謡ひしことあるか書き
こみに母の筆跡をみる(同)
半世紀も前に「母」が使った「謡の本」をもって「能」を見に行く歌であ

る。また、謡曲「野宮」の詞章に書き込まれた「母の筆跡」をたどりながら、亡き母に思いを重ね、命を重ねる歌である。作者の父である白川静は、研究のみに没頭されていたように思われているが、とても余裕があり趣味もあった。若いころなさっていた山歩きや散歩、碁などである。また、奥様と一緒に「謡」をうたわれることもあった。

「私の家内も長らく梅若の謡をつづけており、卒業生の会に夫婦で招かれたときは、立歌の代わりに、終りに小謡一曲を連吟することもある」（『回想九十年』）と述懐されている。

八十歳の母が点前をする写真背筋のぼしてゆつたりとして（同）

看取りの日も逝きにし後も続ききとお茶名いただく見ませ父母（同）

八十歳の母の「点前をする写真」を見ながら、その背筋を伸ばしたゆつたりした姿に没入する。また母の後をひき継いで「お茶名」をいただいたことを父母に報告する。まさに「母子草」そのものである。母の命が、父の命が

まさに今の自分を培い育んでくれているのである。まさに父母からの「いのち」のリレーの歌である。

「史」また「遊」しばし語りてしめくくりて順化小学校の「化」の字を選ぶ（同）

生家前に建ちたる石碑の文字は「遊」父と遊ばな母と遊ばな（同）

父の故郷である福井に招かれた時の歌である。父・白川静が解説し、究明し、そしてわが名につけてくれた「史」の字について、「遊」の字について、順化小学校の「化」という字について話をしているのである。また、生家跡には父が生涯を賭して解説した「遊」の字の石碑が建てられているのである。まさに「父子草」そのものである。

父の名も出るとふ映画の撮影のすすむか「京都大秦物語」（同）

「京都大秦物語」は、松竹・立命館大学・京都府の三者によって立ちあげられた「産学官連携プロジェクト」の一環として山田洋次監督のもとで立命館大学の学生が携わって創られた映画

である。その中で、主人公の京子が図書館で「白川静文字学」を研究する榎大地と出会うというストーリーである。

「もう帰れ」父の優しき声のして墓前のローソク風に消えたり（同）

父の墓前にぬかずき、じつと父との思い出に慕っていたのである。どこからともなく「もう帰れ」という、父の威厳のある声がしたのである。「もう帰ってもいいよ 史よ」と、いつしか優しき声として響いて来たのである。いつも、父の声に導かれて生き、父の仕事を傍らで手伝ってきた作者にとっで、まさに、亡くなった今でも、その声は生き生きとよみがえり、聞こえてくるのである。歌集の「あとがき」によると「月日は何とはやくすぎゆくことか。四月六日は母の七回忌。四月九日は父の生誕百年の日になる」とある。父の夢、母の夢を引き継いでいこうとする娘にとって、いまも父と母のこえがヴィヴィッドに聞こえてくるのである。

ほろ酔い詩歌紀行

万太郎の酒



日高 昭二

(神奈川県大学教授)

人見しりがはげしく、照れ性で、「面と向かつてはまともにものが言えない」とされる人が、酒で救われるということがある。江戸の情調を小説や芝居にあらわし、また俳人としても知られる久保田万太郎という作家は、そういう人であったようだ。

「飲み友達」という言葉があるが、万太郎にあつては、「酒という媒体」があつたから「友達」とのつきあいが出来たのだという。万太郎とは永いつきあいのあつた劇評家の戸板康二の言葉である。

万太郎は、自分ではいっぱしの酒飲みだと思っていたようだが、彼の酒の飲み方を見ると、酒を味わうとい

うより、あきらかに酔うために飲むという感じであつたという。そういう彼の口癖は「格好がつかない」とされるが、だから「格好」をつけるためには、ビールや洋酒ではだめで、そこはあくまでも日本酒でなければならなかつたと戸板はいう。

熱爛にうそもかくしもなしといふ
爛ぬるくあるひはあつくしぐれかな
熱爛や手酌いかしき一二杯
猪口の手にうつりてきゆる火花かな
ひとつづつ受けて十猪口や年忘れ
年惜しむ酒にがき酒飲むはかな
熱爛のいつ身につきし手酌かな
熱爛やはやくも酔ひしあとねだり

熱爛と猪口。その二つを合わせて飲むという行為が、他人との間合いを取るためには不可欠なことであつたことがこれらの句でもよくわかる。また、猪口については、酒の風景そのものをあらわす小道具の一つでもある。

煮凝や小ぶりの猪口のこのもしくど
ぜうやの大きな猪口や夏祭

猪口と料理の取り合わせが、じつにしつくりと、するどく示されていて、万太郎の目の力に思わずこちらもうなづいてしまう。なかでも二つ目の句は、東京・浅草の有名な泥鰌屋にまつわる句で、その前書きに「鰌をどぜうと書くは『駒形どぜう』の先代のはじめたるところによる。ひつきようこれをもつて商標とはしたるなり」とある。商標の来歴と深くかわりながら、同時にその「どぜう」が「大きな猪口」とよくマッチしているという食の景色が、よりいっそうあざやかに浮かび上がる仕掛けにもなっている。

この「どじょう」と「夏祭」も含めて、酒と季節は切っても切れない関係にある。万太郎には、この二つを結んでそれぞれに味わい深い句がいくつもある。

花冷えの爛あつうせよあつうせよ
梅雨ふかし猪口にうきたる泡一つ
友ぶねにすでに酔ひどれ夏の月
ころあひにつきたる爛も夜寒かな

ところで、万太郎にとって酒といえ、それは日本酒でなければならなかったというが、それにしても酒の肴は素朴なものばかりである。万太郎は、あるアンケートに答えて「わたしのきらひな食物は、うに、からすみ、このわた、しほから。その他酒飲みよろこぶもの一切」と書いている。したがって、彼の俳句には、そういう類の食べ物が出てこない。逆に「せっかくのお志には候へど……」という前書きを付した次のような一句もある。

すつぽんもふぐもきらひで年の暮

では、それに代わって出てくる肴といえ、そらまめ、筍、煮大根、海苔、きゅうりもみ、かまぼこ、うど、みつば、湯豆腐、おでんなど、いたってありふれたものばかりだ。これらが酒の肴の主役をつとめていて、季節感もとより彼の日々の生活を知るよすがにもなっている。

その一方、酒場の風景をみつめる彼の眼にも独特のものがあって、酒を飲む人々の姿がこれまた鋭く浮かび上がっている。「大阪にて、ゆくりなく故水上瀧太郎を知れる人に逢ふ。その人、ありし日のその豪酒ぶりについてつぶさに語る」という前書きをもつ次の一句などがそうである。

熱爛のまづ一杯をこゝろめる

まるで芝居の一こまを見ているかのような場面で、前書きを合わせて読むと、この人にとって酒と人生とはどう

いう関係にあったのか、こちらも聞いてみたいという想像に駆られる。次の「浅草」という簡単な前書きを据えた句にも、同じ思いが浮かぶ。

おでんにすしやのあるじ酔ひ呆け

下町ならではの取り合わせというべきか、この二人はそのままで人生という舞台を彩る絶妙な役者と化している。もちろん、万太郎には酒を飲む他人の姿ばかりではなく、自分自身の姿をとらえた句もまた散見する。

夏瘦やほのぼの酔へる指の先
熱爛やかゝめた背にすがる老イ
老残のおでんの酒にかく溺れ

そういう万太郎の、酒と人生が凝縮してうかがえるものとして、誰でもがあげる代表句が次の一句である。

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

私の池袋



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

昭和九年六歳の私が入学したのは、池袋西口前の豊島師範附属小学校である。

当時の池袋駅は、本当に小さな建物であった。私は今要町と呼ばれる長崎東町三丁目から、バスに乗って通学することになった。

首から紐でつるしたがま口には、バス代の六錢片道三錢が入れてあった。

地蔵通りを曲がると下田橋、丸山、これは立教大学前の駅名で、大学の前には池袋第五小学校があり、そこで降りる子も何人か居た。

学校からの帰り、バスの終点で降りると、雨の日はそこから近くの魚屋さんに傘が届けてあって、それをさして家に帰る。

脳溢血で倒れてから、体の不自由な祖父、父方の祖母、母方の祖母、両親兄妹のいる家は、昔麦畑であったという。

どこもかしこも空地があり、中仙道に面した私の家の前は一面の原っぱであった。少し奥に入ると、建物もまばらな農村という風情で、弁天様の森などは行ってはいけないという淋しい場所であった。

所であった。

牛蛙が鳴くといつて祖母と聴きにいったが人のうなり声のようで怖かった。

小学校へは電車で通う子も何人か居た。定期をもって通う友達がうらやましかった。

目白や遠くは下井草辺りから電車に乗りついで登校する。一人で電車に乗ってくる人達は大人っぽく見えた。

池袋の東口には市電が通っていて、それに乗って来る人もいた。

西口の前には、東京パン、清水屋、十錢ストアがあり、東京パンは上が食堂で、父につれられて兄妹でアイスクリームなど食べにいった。

下はや、高級な食料品の店で、ケーキやソーセイジなど並んでいたと思う。

清水屋はもつと大衆的な店で、ここでもアイスクリームを食べたことがあった。

十錢ストアは今の百円均一の店のように、何でも十錢であった。しかし少し高いものもおいてあったと思う。果物屋のゆう文も駅の横だった。

駅前から学校の校門までの道は、両側にいろいろな店が並んでいた。靴屋、パン屋、文房具屋、菓屋、あんみつなど食べさせる店、その間を歩いて皆登校した。

小学校の六年間は、まだその姿が残っていたように記憶している。女学校に通学した頃も小売店は多少模様がえしたが、まだ池袋西口は静かでどこか田舎風であったと思う。

戦争の影が次第に近づいてきた頃、私はこの小さな駅から、赤羽の被服廠に通ったのだ。兄が出征し、弟は学童疎開し、祖父は亡くなって家族も少なくなっていた。

昭和二十年四月十三日の空襲は、その穏やかな池袋周辺をことごとく焼きつくした。

その日城北地区に來襲した米軍機は352機、落とした焼夷弾は約二千トン、死者二千四〇〇人という記録が残っている。

私は昭和二十年の四月渋谷にある女專の国文科に入学していた。

空襲の日は父と祖母と妹と四人が家に居た。

母は幼い妹たちと疎開していた。すさまじい火の手が迫りを明るくし、

私と妹は畑の多い奥へと道を走った。

夜が明けて帰ると家は残っていたのだった。家の前を煤(すす)で真っ黒になった人たちが通っていた。私の小学校は辛うじて残り、師範の本校はすっかりなくなってしまった。

その後ですさまじい勢いで闇市が林立して池袋は無頼の土地になっていった。

昔の池袋は全く姿を消してしまっただのだ。

やがてデパートができ、次々に新しい店が出来て闇市はなくなり、その跡に都の芸術劇場が建ったのである。

附属小学校は壊されて、西口の広い公園に変貌した。今も小さく碑が立って豊島師範附属小学校跡と印されている。

池袋の西口の古い店はほとんど姿を消したが、や、長い店は三原堂、ゆう

文も場所を移して残っている。

羽村の娘の家からの帰りの車で、東京パンの古びた看板だけが見える処を通るのだが、その看板を見るといつも心が痛む。

今私は月一回、短歌の会をするのに芸術劇場の会議室に通っている。

五階までの長いエスカレーターを上り会場に入ると、窓から見える池袋周辺は、高い建物に囲まれていて木の影もない。

窓の外を時折鳥がよこぎってゆくのみである。この劇場は奇しくも師範学校の跡地に建てられた。かつての校庭にはプールがありなぜか相撲の土俵もあった。又秋になると花壇には一面小菊の花が咲いていた。

たまたま縁あって、その懐かしい場所にも一度立つことができるのは晩年の私にとって、嬉しいことの一つである。

歌会が終わり外に出ると小学生の私が入り込んで帰った道を、車が次々と走ってゆく。

蝉しぐれ



宮地 智子

(詩人)

確か、フランスの、ある心理学者の言葉だっと思うが、私が時々思い出しては生きる糧にしている言葉がある。

それは、「人間は死ぬまで生長し続ける動物である。そして死ぬ時こそが最後の生長を遂げる時である。」という意味の言葉である。

私が今、ただか六十三歳と少しである。だから本当は、私に「詩人」という肩書きは早すぎる。「酒林」のエッセイで、私の名前の左下のカッコのな

かに「詩人」とあるのは私としては実は面映く恥ずかしい。

それでは一体、私とは何者だろう。

「十年一日のように暮らしている主婦である」とも言えるし、「自分自身の詩の完成を目指している詩人の卵である」とも言える。大まかに言うところ、この二通りの言い方で表される私が、同時に私のなかで生きていますのである。思春期の自我の目覚めの頃に始まった私の、詩への渴望は、実に混沌としていた。

短歌や俳句は、毛嫌いし、専ら形象(イメージ)や象徴による表現を求め、流れる言葉の調べを斥け、しかも他人の作品はろくに目も通さず、自己の荒ぶる精神を宥めていただけだったように思う。

一方で、生きて行く方法が私には見づからなかった。戦後の復興に骨身を削った親達の庇護のもと、物質面では何不自由なく育ったのだったが、心のなさは、空虚感を抱えたまま大人になった気がする。だから私の本当の人生は子供を持ったときから始まったと言っているかも知れない。

夜、子供達が寝静まった後でノートを広げ書いた詩は「詩学」に投稿し、殆どは載らなかつたものの、それは、詩学社の社主でもあった嵯峨信之氏への便り、といった意味あいもあったから、それでも構わなかつた。

私の今までの人生でたった一人、師と仰ぐことのできる嵯峨先生は十三年前に亡くなったが、その先生から頂いた手紙やはがきを、私は大切に取って

ある。「感銘を受けた詩の一行」届きました。読んでみると赤ちゃんの泣き声が聞こえる。面倒だったでしょう。御苦労さまでした。君の出版記念会では逢えますか。でも無理な出席はさげなさい。亭主第一。子供第二。阿々。私が何を書いたか忘れてしまつたが、恐らく、短いエッセイを「詩学」に送つた、その返事であつたと思う。また、その頃に頂いた別の手紙には、まるで詩のような表現で、私の日々の暮らしを察して下さつたものがある。「……時間の毛羽立ちというものを感じるでしょう。」と。

実人生の、阿鼻叫喚のまつ只中にいる私にとって、時間の毛羽立ちなどという美しい表現は無縁なものに思われたのに、私は、こういった表現に出会つたことよつて、自身を客観的に置いてみることの効用を実感したのでつた。私の日々の骨折（それは人間として誰しも味わう労苦に他ならない）を、美しいものとして見ること。（永遠は時間（とき）が作るものに憧れる）とい

う詩の一行や、静かな人は遠くへ行く」といふ詩の一行も想い出されて、詩への渴望は、私の心の中でより深まつた。それと同時に私の暮らしは多忙を極める一方であり、疲労は募るばかりであつた。「文学なんていつたい何になる」といふのが実感であつた。

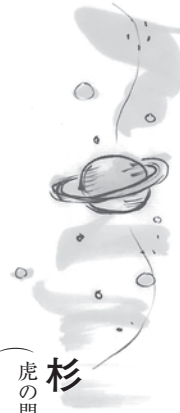
時間は刻々と過ぎ、子供達は社会人となり夫の両親も自分の両親も送り、今漸くゆつくりと机に向かうことができ、気がつくと思暦を過ぎていく。かき乱され濁つた水が、次第に砂が沈んで澄んだ水が戻つたような、そんな今の暮らしを、私はとても愛している。

「十年一日のように暮らしている主婦である」と、「自分自身の詩の完成を目指している詩人の卵である」と私が近づいて仲良く並んでいる、と言えいいだろうか。

けれど悲しいかな、今、私は詩の書き方がわからない。若い頃にあれ程忌み嫌つていた俳句や短歌にも親しみ、口ずさむという嬉しさ、楽しさにも惹かれていく。日本の短詩型文学の伝統

は根深くわが国に根を張っていることに救われる思いもしている。けれどやはり新しい詩が書きたい。これは「詩人の卵」としての私の現在である。一方、「主婦」である私もまた、課題山積である。学生の頃から毛嫌いしていた英語を使わなくてはならない羽目になり、英会話の勉強を始めた。なかなか上達しないけれど、外国語を学ぶということは、日本語を学ぶことでもある。ということを実感している。若い頃に怠けたことの罅寄せが来ている。浄土宗のカレンダーの標語にある「道に迷つて道を知る」を實踐しているようなものである。数年前、「蝉しぐれ」という題の詩を書いた。「この世に生まれ落ちてから／このかた／わたしのしごとといえは／この世に慣れること／ではなかつただろうか／すっかり慣れた／その時こそ／あの世に行くときではないか／／蝉しぐれを聞きながら／わたしは机に向かう／／まだ慣れないこと／／安堵しながら」

今年の健康 宇宙飛行士の泣き所 骨粗鬆症



杉本 忠夫
虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医

一九五七年ソビエトが世界で初めて人工衛星スプートニク一号の打ち上げを成功させ、その偉業に世界中があつたと驚嘆の声をあげたものでした。その後、絶え間のない人工衛星の開発進歩には目を見張るものがあります。

再び世界の人々を驚かせたアポロ十一号の月面着陸を初め、日常生活に欠かせない気象衛星、ケイタイの通信衛星、カーナビのGPS衛星、そして宇宙旅行の夢を適えてくれる国際宇宙ステーションなど多くの成果があります。

最近、日本でも小型小惑星探査機「は

やぶさ」が二〇〇五年九月に小惑星「イトカワ」の探査を目的に打ち上げられました。そして、二〇一〇年九月にオーストラリアのウーメラ試験設備へサンブルカプセルがリターンしたことは大きく報道されました。改めて、日本の人工衛星技術の高さが世界に証明されました。

ところで、国際宇宙ステーションや宇宙船では無重力状態になることはよく知られております。大きな宇宙飛行士が軽々と宇宙遊泳を楽しんでいる様子がテレビで報道され地上の人々を驚

かせています。

話は変わりますが、高齢者の方は軽い転倒や、ベッドから滑り落ちるなど軽い事故で大腿骨頸部骨折をきたすことが多いといわれています。骨折の原因は加齢と共に進行する骨強度の低下、つまり脆くなる骨粗鬆症のためと考えられております。

約一〇年前までは、高齢者が大腿骨頸部を骨折すると、高齢者の方では骨折の修復手術などは諦めておりました。

下肢が不自由なため日常生活が制限され活動力、生命力共に著明に低下しておりました。また、骨折した高齢者の介助に家族の負担が重荷でした。

しかし、最近では医療技術の進歩により、かなりの高齢者の大腿骨頸部骨折でも修復手術が可能になりました。

修復手術後、早期にリハビリを始めることにより、離床が早くできるようなりました。それにより社会復帰が可能になってきました。現在、術後三〜四週間で退院可能となつてきております。

では、話を宇宙飛行士に戻しましょう。宇宙飛行士は無重力状態で生活するため、骨粗鬆症になるといわれております。そこで、この予防法の開発に努めた人工衛星創業時の宇宙飛行士がいます。それはソビエトの人工衛星に長期間滞在し、また人工衛星に複数回搭乗した医師でもある宇宙飛行士でした。彼は人工衛星内にいるいろいろな器具を持ち込み、また工夫をして、筋肉を使う運動することを試みました。しかし、彼の企ては成功せず骨粗鬆症は防ぐことはできませんでした。

最近、この分野で興味ある研究発表がされております。それは、国際宇宙ステーションに長期間滞在した宇宙飛行士の骨強度についての研究発表です。では、その研究論文をみてみましょう。

国際宇宙ステーションに長期搭乗した十三人（男性十二人と女性一人）の宇宙飛行士が受ける微小重力環境（無重力）下での骨強度へ影響について詳細に検討されております。

宇宙ステーション内の宇宙飛行士が

搭乗した期間は四・三（六・五ヶ月間）でした。

この研究では宇宙飛行士の骨強度の減弱について従来のDEXA法ではなくCTと新しいコンピュータソフトを用いて研究が行なわれました。まず、国際宇宙ステーションに搭乗する前に大腿骨頸部のCT画像を撮影し大腿骨頸部の強度をコンピュータで計測します。その後、国際宇宙ステーションに搭乗し長期間滞在后、地球に帰還して再度同様のCT検査を行なつて骨強度の搭乗前後について検討しております。

その結果、大腿骨頸部の骨強度は平均十四・三%低下していました。骨強度が十三人の中で最大に低下した宇宙飛行士は搭乗前より約三〇%も低下しておりました。また、一ヶ月間で宇宙飛行士の骨強度は平均二・六%の割合で低下したことになる報告されております。

このように無重力状態では骨強度が極端に低下し、宇宙船内の無重力状態は骨粗鬆症を進行させることが改めて

明白となりました。このように科学の粋を集大成した宇宙ステーションにおいて人体におよぼす宇宙の計り知れない難しさが潜んでいるように思われます。

再び、話を骨粗鬆症に戻しましょう。先ほどの宇宙飛行士にみられる骨強度の低下は地上の人間にも当てはまりません。つまり、病気などで臥床すると極端な運動不足になり、骨強度が急速に低下して骨粗鬆症をきたし骨折しやすくなることとなります。また、高齢の方は運動量が少なくなり骨折しやすくなります。

最近、骨粗鬆症の新薬が開発されています。しかし、画期的な薬は未だ発見されておられません。今後、さらに科学的に研究を行ない、骨粗鬆症の根本的な治療法の発見が望まれます。

それまでは、歩くことが大切です。たとえば五歩、十歩の歩みといったわずかな歩行でも宇宙飛行士にはできませんが、地上の人間にはできる骨粗鬆症の進行を食い止める方法です。